

テーマと講師について

コンテクストデザインワークショップ

1

チューニング ―次元の断面を切るあかり―

5.31 (土)



ラジオの周波数を合わせたり、楽器の音階を調整することをチューニングという。それはノイズの中から意味ある層を探し出す行為であるといえる。チャネリングとは意識のチューニングである。一見何もないように見える空間にもチューニングのしかたで見えてくる次元が潜んでいる。たとえば、不規則な形状の断面を光で断層写真のように切っていく時、突然三日月の形に見える断面が現れる。そんな具体的な実験と探求をしてみたい。

講師 上林壮一郎 (デザイナー、京都造形芸術大学准教授。東京工芸大学非常勤講師)

1967年東京生まれ。千葉大学大学院工学研究科修了。京セラ株式会社勤務後、ミラノのドムス・アカデミー、スタジオ アンドレア・ブランジを経て1999年スタジオ アルキメデス設立。第10回コイズミ国際学生照明デザインコンペで銀賞受賞。「PRESENCE展」「MONEY DESIGN展」「HIDDEN FURNITURE展」「暗いあかり展」「POLY-SITE」の一連の展覧会など展覧会出展多数。

2

異界と結ぶ舟 ―キャンドル立てを作る―

6.22 (日)
7.21 (月)



陶芸ワークショップとしてこれまで窪み、楽器、地面を写した皿などうつわのもつ「うつ」という言葉に秘められた、移る、写る、映す、空などの意味の重なりを制作の中に展開してきた。うつなるものは、そこで何かが生成する場である。そして今回は、うつ口舟ともうつ舟とも呼ばれるあちらの世界とこちらの世界を結ぶ器である舟をテーマに、光のいれものであるキャンドル立てを制作する。1回目は制作、2回目は点灯会を行う。

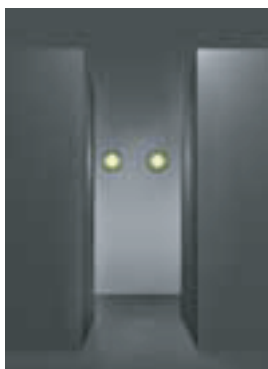
ゲスト講師 川村紗智子 (陶芸家)

東京生まれ。NPO法人東京自由大学 理事。武蔵野美術短期大学卒業。ガラス工芸への関心と制作から陶芸の世界に入る。宇宙・自然・曼陀羅をテーマに斬新な陶芸作品を制作。走泥社同人。個展多数。現在、川村クレイワークスタジオ主宰。

3

スキマロボット ―隙間、地、空洞を擬人化する試み―

10.18 (土)



電子レンジやシュレッダーに、目や手をつけて自らを説明するというエージェントロボット。物に対する我々の認識を揺るがすようなロボットを研究している大澤氏。一方で家具と家具の隙間や、図と地の地の部分、空洞など認識しにくいものを認識しようとしている上林氏。二人のコラボレーションにより、気配をロボット化する感覚を体験するワークショップ。

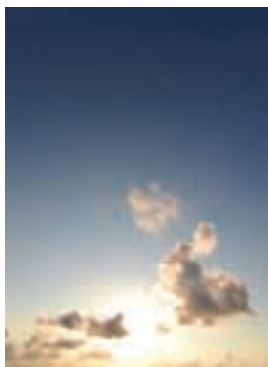
ゲスト講師 大澤博隆 (慶應義塾大学理工学研究科後期博士課程)

1982年横浜生まれ、千葉育ち。慶應義塾大学理工学研究科修士課程終了、現在、同研究科後期博士課程。情報工学科の安西・今井研究室に所属し、デバイス開発や対人実験を通じて、『擬人化現象』を利用した情報提示手法の可能性を探っている。2006年度上期末踏コース所属。共著書に『人とロボットの＜間＞をデザインする』東京電機大学出版局。
<http://www.ayu.ics.keio.ac.jp/~osawa/>

4

エネルギー・ポエジー ―太陽エネルギーの詩的利用―

09.2.22 (土)



エネルギーは実質的に社会を駆動させる源であると同時に自然や現象との関わり方を示すものです。一見、対極にある「エネルギー」と「詩的なもの」を直結させ、日常の中のささやかな「精神の生態系」を構想します。今回は、最も大きな生命の基盤である太陽とそのエネルギーにフォーカスし、光、熱、時、気象、電磁波、発電、などの包括的な視点で意味の組み替えと生活との関わりを考察します。

ゲスト講師 三浦秀彦 (デザイナー)

1966年岩手県生まれ。多摩美術大学及び東京工芸大学非常勤講師。2000年クラウドデザイン設立し、プロダクト、家具、空間、グラフィック、インタラクション等のデザインの実践と実験を行っている。また、90年代より地平線や地形、大気をテーマに身体性やインタラクションを意識したインスタレーションを発表。日常の中にある創造性や意識と現象の関係性を思考している。